

国 語 科

石 川 誠
山 本 瑞 穂
山 口 久 代

1 めざす子どもの姿

私たちは国語科の本質を「豊かな言語生活を営むことができること」ととらえ、その本質に基づく基礎・基本を「国語を適切に表現し正確に理解すること また それを基に伝え合う力を育てること」ととらえ、研究を進めてきている。

今年度は、次のような子どもの姿を国語科の授業において、めざしていく。

進んで言語に働きかけ、豊かな言語で伝え合おうとする姿

進んで言語に働きかけるとは言語としての国語を話す、聞く、書く、読むことはもちろんのこと、これらの言語活動を通して思考を深めたり、想像を膨らませたり、心を育てていくことを意味している。さらに、他者と言語を通して互いの立場や考えを尊重しながら、コミュニケーションを持つということでもある。つまり、言語を通して認識力、思考力、想像力、判断力、言語感覚、豊かな心情を培うことであり、他者との関係のなかで豊かな人間性を育むことにつながると考える。

豊かな言語で伝え合うとは「国語を適切に表現し正確に理解すること」を基に伝え合うことにつながる。つまり、豊かな言語とは「国語を適切に表現し正確に理解すること」で培われるものである。具体的な場面で目的に応じて、自分の考えや意図が分かるように効果的に話したり、書いたりすることであり。話し手や書き手の意図を考えながら、内容を正しく聞き取ったり、読み取ったりすることである。

それを基に伝え合うとは、互いの立場や考えを尊重しながら、さまざまな言語活動を行うことによって、互いの思いや考えを伝えたり受け取ったりすることである。

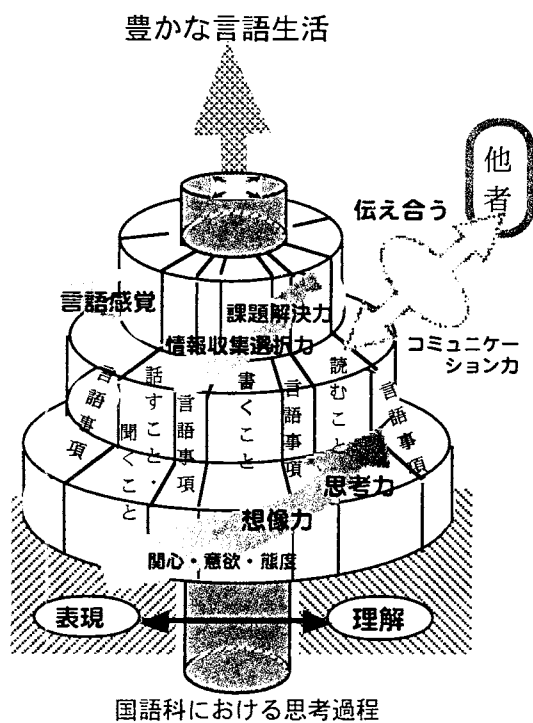
子どもが学習材と出会った時に、これまでの生活経験や学習経験をもとに、話したい、聞きたい、書きたい、読みたいという思いがわき起こってくる。学習を進める中で、その思いが、自分なりの表現でもっと上手に話したり書いたりしたいなどの思いになる。そのために、自分自身の課題を見つけ、その課題を解決するために言語に働きかけていこうとする。そして、最終的には、他者と考えを交流したいという強い思いにつながっていくのである。

これをもとに、自分なりの課題を持ち、その課題に沿って、解決の過程を考えたり学習の方法を工夫したりする。また、自己学習することで自分の考えを持ち、それをもとに課題を解決していこうとする。

言語から感じたことや想像したこと、考えたこと、理解したことを、生活経験や学習経験と関連づけたり、他者と聴き合い話し合ったりする中で、自分の思いや考えを深めていく。国語科では、特にこの過程を大切にしていきたいと考える。互いの考えを伝え合うために、より適切な表現をしようとするであろうし、正確に理解しようとするからである。聴き合い話し合っただけで自分の思いや考えを深めていく過程では、コミュニケーション力、認識力、思考力、想像力、判断力、言語感覚などが発揮される。

さらに、自分の言語活動をふり返り、自分が得た内容や身につけた力を自覚し、次への課題を明らかにしたり、いろいろな場面で生かしていこうとする。これらの力が互いに連動し合い支え合って、よりよい言語活動へと導いていくのである。それらの力を身につけていくことによって「個」の確立した姿へとつながっていくと考える。

今まで述べてきためざす子どもの姿は、わたしたちが規定している国語科の本質やそれに基づく基礎・基本、ひいては生涯学習を視野にいたためざす子どもの姿であると考えられる。



言うまでもなく、国語科で習得する母語としての日本語の能力は、日本人としての生活の基礎である。それだけではない。すべての学習が、相互協力や共同思考に必要な言語能力がなくては成立しないのである。学校教育における教科等のすべてが学習者の人間形成を目指すものであることはいうまでもない。そして、国語科においては、豊かな言語生活を営むことができるようになることは、生きる力を育むことにもつながり、一人一人の人間性を形成するためにも、文化の継承・創造のためにも大切なことである。これは、生涯学習を視野に入れた場合、小学校で身につけるべき力は将来の豊かな話す・聞く・書く・読むの生活の基礎として生涯学習につながるものであると考える。

2 めざす子どもの姿にせまるために

(1) 一人一人の言語活動への働きかけを促す

一人一人の子どもの実態を把握し、「こんな力をつけてやりたい」という願いをもとに、単元が終わった時の子どもの姿を想定したうえで学習材を選ぶ。

そして、子どもにとって必要感があり、主体的にかかわっていける言語活動になるように、子どもが興味・関心を持てるような学習材との出会わせ方を工夫する。

また、学習内容や学習方法を、子ども自身が考えたり選択したりできるようにする。

(2) 学習の見通しが持てるように 自分の思いや考えの表現を促す

子どもが自分なりの思いや考えを持てるように、これまでの生活経験や学習経験を生かして言語と向き合うことのできるような活動を取り入れる。その上で、学習材と出会った時の子どもの感動や疑問を素直に表現する場を設け、それを全体に広めたり位置づけたりすることで、学習の見通しが持てるようにする。また、自己学習の場を設定し、十分な時間を確保することで、より能動的な学びへとつなげていきたい。

(3) 互いの考えを聴き合い話し合う場を設定し 自分の考えの再構築を促す

一人一人が読み取ったこと、考えたこと、根拠となることを聴き合い話し合い、練り上げていく活動を通して、自分自身の読み取りや思考が高まっていくことになる。自分なりに読み取ったことを様々な表現方法で聴き合い話し合うことによって、新しい知識を得たり曖昧だった考えが確かになったりして、互いの考えをさらに深めていくことができる。一人一人にとって意味のある話し合い活動の場になるように、学習形態を工夫する。その際、お互いの立場や考えを尊重し認め合うことが大切である。

(4) 自己評価活動で 自分の言語活動のよさの自覚を促す

その単元で学習したことを課題ごとに、継続的にふり返る場を持つ。自分が得た内容や身につけた力を自覚したり、互いに評価し合ったりすることは、次単元への意欲にもつながり、ひいては、これからの日常生活の中で起こるであろう様々な言語活動の場の中に生きてくると考える。その際、書く活動を取り入れることによって、学習の結果を目に見えるものにするには、自己の変容の自覚には欠かせないものである。

また、本校では、それぞれの子どもがその日の自分をふり返り、心に残ったことや自分なりに思ったこと考えたことを、「あゆみ」の中で毎日綴っている。その「あゆみ」を活用することで、授業とは時間をおいて自分を見つめ直すことができ、さらなる自己の変容に気づいたり、新たに発見したりすることができる。

3 実践例 ー 6 年 ー

(1) 単元名 作家の生き方や考え方を感ずる読書活動をめざして
～「イーハトーヴの夢」をきっかけとして～

- (2) 目標
- ・作家の生き方や考え方を知って、作品を深く味わう体験をすることで、さらに自分の考えを広げたり、深めたりするような読書生活をしようとする態度を育てる。
 - ・読書のよさを感じ、読書に親しもうとする態度を育てる。

(3) 指導にあたって

本単元におけるめざす子どもの姿について

本単元におけるめざす子どもの姿を「作家の生き方を知り、作品の中に作家の考え方を感ずながら読書すること」ととらえている。

じっくり読書して自分の心と対話しながら読み進めたり、作家の生き方を感じ取りながら読み込んだりといった読書経験が少ない今の子ども達。わくわくどきどきしながら無限の想像を広げていくといった読書経験の積み重ねで心が豊かに育っていく。読書は心の栄養であるからこそ本離れの進んだ子どもに、心から感動できる本と出会い、味わい、作家や作品について仲間と考えを交流することを通して、「今度はあの作家の、あの作品を読もう」といった意識が芽生え、それが自分なりの生涯読書生活を形成する基礎となっていくだろう。

本学級の子どもは、国語の教材文には真摯に向き合い、書かれていることを少しでも豊かに読み取ろうとする子どもが多く、文や言葉から想像を広げ、仲間と読みの交流をする活動を通してさらに深まった考えを構築できるかなりの国語力を持つ子どもも少なくない。だがそれが関連読書やテーマ読書へつながったりすることはあまりないように思われる。国語の授業で培われた力と読書生活がまだつながりが薄いのが現状である。

そこで、本単元では中核となる教材文の「自分のことより他人のことを大切に考え、名声や富よりも自分の夢の実現に尽力する」賢治の生き方の読解指導に加え、並行読書・比べ読みなどの読書活動を取り入れる。そうすることで読書をより身近に感じ、一人一人が自分の読書生活を見直し、もっと豊かな読書経験を積み重ねていこうとする姿勢を身につけてほしい。さらにいろいろな作家の生き方・考え方にまで思いをはせ、味わった感動を自分の生き方を見つめ直すことへつなげ、「もっといろいろな作品を読んで、考え方を、そして心を豊かにしたい」と思うまでに高まることを期待している。

めざす子どもの姿に迫るために

① 一人一人の読解・読書活動への自発的な働きかけを促す

賢治の生き方を端的に表現した『雨ニモ負ケズ』。ふじだなおとぎ会で群読し、声に出して読むことでその世界に浸ることができた。自分たちには欠けていると思われる思いやりや慈悲の心をもつ賢治の本質に驚きと憧れを感じ、賢治作品を積極的に読むことだろう。その時は作品に多く触れる読書環境を整えたり、本の紹介コーナーを朝の会などに組み込んでいきたい。

② 学習の見通しが持てるように 自分の思いや考えの表現を促す

『イーハトーヴの夢』を読んで賢治の生き方や考え方に感動した心の動きをキーワード板書をもとに、みんなで話し合っていくことで、さらに感動を深め、賢治作品に込められている賢治の思いを知りたいと思うだろう。そこで賢治作品についての紹介コーナーを作ったり、本の紹介ポスターを作ったりして、読書環境を自分たちで整えていくまでの充実した活動にまで、高めていきたい。それをほかの作家にまで発展させ、作家と作品コーナーを図書室につくらせたい。

③ お互いの考えを話し合う場を設定し 自分の考えの再構築を促す

教材文のそれぞれの読み取りを交流する時に、ペア（バディシステム）やグループでの対話を取り入れることで、自分とは違った見方で、またはよく似た考え方でとらえていることをお互いが話し合い、認め合うようにする。また、対話を通して深まった考えをみんなで話し合い、交流し合うことで、自分に返し、自分の生き方を考えるにまで高めさせたい。

④ 自己評価活動で自分の活動のよさの自覚を促す

賢治作品の並行読書で広がった読書体験をさらに豊かにするため、ほかの作家の作品にも挑戦

し、読書の幅を広げ、作家についての資料を作成したり、本の紹介ポスターを作ったりして、読書環境を自分たちで整えていくまでの充実した活動につなげてほしい。

単元計画（総時数 13 時間）

主な活動と内容	めざす子どもの姿に迫るために	評価のポイント
1 賢治の作品に出会い、作家である賢治に興味を持つ ・『雨ニモ負ケズ』をおとぎ会で群読しよう ・『よだかの星』は悲しい内容だね 賢治自身の体験が元なのかな 作家の生き方・考え方を感じる読書をしよう	①	宮沢賢治の生き方に興味を持ち賢治作品への興味をもつことができる
2 教材文から賢治の生き方を読み取り 自分なりの考えを持つ ・宮沢賢治の生き方・考え方ってどんなものだろう ・『イーハトーヴの夢』の筆者の言いたいことを受け取るよ	②	読み取ったことをもとに 自分の考えを持つことができる
3 読み取ったことをもとに話し合う ・賢治の人間像をまとめよう〈本時〉 ・自分たちの生き方と比べよう	①③④	読みの交流でお互いの考えを聞き合うことかできる
4 賢治のほかの作品を読もう ・賢治の人間像は作品にどう表れているかな ・みんなが読んだ作品のことを伝えたいな ・自分の感動を伝えるためにはどんなふうにとまとめたらいかな	①③	賢治の他作品を読み、賢治の人間像についてまとめることができる
5 賢治以外の作家の作品を読んで、紹介し合う ・作家の生き方が作品に表れているかな ・図書コーナーに作家と作品コーナーをつくらう	③④	お互いの紹介の工夫やよさを認め合うことができている
6 学習してきたことや自分の読書生活をふりかえろう ・作品は作家の生き方・考え方がそのまま表れているんだね	④	豊かな読書生活をしようという意欲を持つことができる

4) 本単元における授業の実際と考察

本単元でのめざす子どもの姿は、「作家の生き方・考え方を知り、作品の中にそれらを感じながら読書する姿」である。まずは自分なりに、宮沢賢治の伝記『イーハトーヴの夢』を読み深める。そして自分なりの賢治像を描き、仲間と賢治像を話し合い、自分の感じたことを交流することで、さらに奥深い賢治像を心の中で想像する。その心を持って賢治の作品と向き合い、読んでいく中で賢治自身の人となりや生き方、考え方が自ずと伝わってくるのではないだろうか。そういう読書の姿勢がほかの作家の作品にまで派生して、今までになかった、新しい読書の姿勢が身についていくことになるだろう。「作家を知り、作品に作家の人生を垣間見る」そんな読書ができると読書の醍醐味を深く味わうことになり、生涯読書への基礎が築かれるであろう。

前述しためざす子どもの姿に迫る4つの手立てを設け、実践を行ってきた。考察にあたっては単元の流れに沿って、これらの手立てが作家の生き方・考え方を知るための支援となりえたか、自分の読書への姿勢をも見直し、新しい視点での読書生活の基礎を形成することに有効となりえたか、子どもの思いを充分に交流できる単元計画であったかを、子どもの発言や反応、自己評価活動から見ていく。

① 一人一人の読解・読書活動への自発的な働きかけを促す

賢治の生き方に関心を持ち賢治作品への興味を持つことができる

ア ふじだなおとぎ会での『雨ニモ負ケズ』や『よだかの星』の読み聞かせ

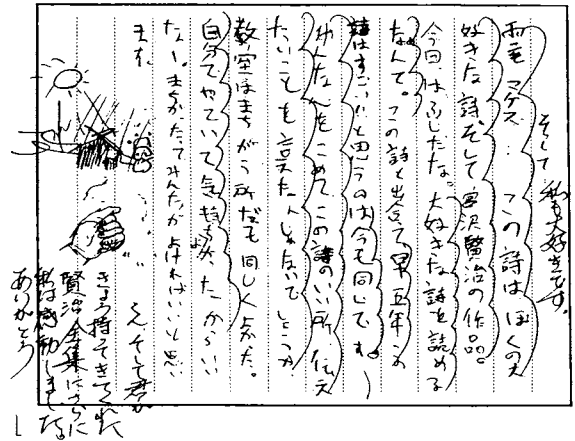
5月、藤の花が咲くころに藤棚の下で全クラスがお話しをする会、「ふじだなおとぎ会」という伝統行事が附属小にはある。特に6年生にとっては6年間の集大成であり、藤棚の下でできる最後のおとぎ会とあって意気込みにはただならぬものを感じていた。みんなで話し合った結果、我がクラスが朗読する作品の一つに『雨ニモ負ケズ』が決まった。出会いは幼稚園の頃に遡るといふ子どももいた。この作品への思い入れがそれぞれにあるらしく、一人一人『雨ニモ負ケズ』

をいかに心をこめて朗読するかを練習のたびに思案し、練習を重ねるごとに賢治の生き方をも感じ取れるようになった。群読して心地よい賢治の言葉のきらめきに太陽の光と爽やかな薫風が重なり、賢治の言葉を味わう感動を仲間と共有できたひとときだった。

時期を同じくして、自分には心通じ合える友達がなかなかできないと思い込んでいるH児がリクエストした『よだかの星』を読み聞かせた。一人一人感じることはいろいろであったが、賢治の独特の世界を少しは感じる事ができたと思う。賢治自身の体験なのか、あるいはどうしても読者に伝えたいことの表現なのか、賢治についてもっと知りたい、作品を読みたい、と思う子どもが増えてきた。賢治の世界に触れることのできるいいきっかけとなった。



雨二モ負ケズ 群読 (ふじだなおとぎ会)



あゆみより

イ 賢治文庫の開設

朝の会や帰りの会で本の紹介をする子どもが増えてきた。「この『注文の多い料理店』は、父が買ってくれた本で、何度読んでもおもしろいのでぜひ読んでみて下さい」とか「祖父が昔子どもの頃、自分のために買った『宮沢賢治全集』でいろいろな作品がのっていて解説もとてもおもしろいし、読解の手引きも書いてあったりして勉強にもなるのでぜひ読んでみて下さい」など、その本購入のエピソードや簡単な内容も交えながら読書を奨励してくれた。それらを教室後ろの本の紹介コーナーに並べ、さらに図書室から借りてきた二十数冊と合わせ、さながら賢治文庫の開設であった。空いた時間や休み時間に少しずつ手にとって読む子どもが増えてきた。賢治の世界に浸り、触れる作品の広がりをも促すことにつながった。だが賢治の独特の表現がわからないとか馴染めないとかいって、読むことに抵抗のある子どももいた。この中であってH児は賢治全集の中の『グスコブドリの伝記』に興味を持って真剣に読み進めていたのが印象的だった。これが5月27日のH児の発言につながっていったことは後でわかったことだった。グスコブドリに重なる賢治自身の姿を敏感に感じ取り、授業の発言で多くの子どもを動かしたことは、H児の自信につながると共にクラスの中でのH児の存在感が実に大きくなった気がした。(ノート参照)

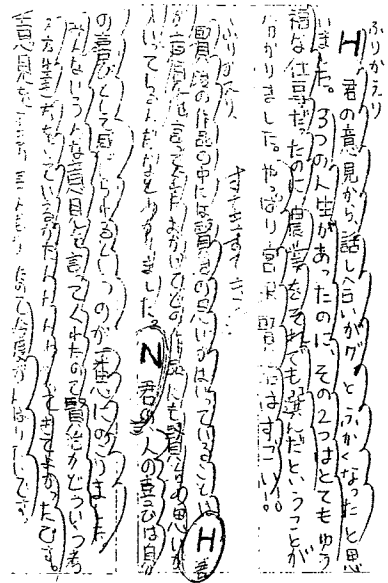
5月27日 H児の発言の重みを受け止め、成長できた子ども達
課題「賢治の生き方・考え方を
さぐろう①」

(省略)

- C: 賢治は自分を生け贄にしているような気がした。
- C: 自分よりも相手を大切にすることが賢治の喜び、情熱なんだと思う。
- M児: 農業が苦しいものでなくなるためには、何か生け贄のようなものが必要だったと思う。
- C: 二度とない生涯を捧げている。
- C: 農業と文学に貢献し、国の能力を引き上げるために自分の人生を注いだ。
- H児: M児の言ったことで思ったんだけど、「グスコブドリの伝記」の主人公はブドリは、最後自分の命に変えて誰かがしなくちゃいけないという行動をした。そうしてみんなを救った。賢治の作品は、自分の経験とかを表している。ブドリは賢治自身のことだと思う。
- C: 「風の又三郎」では、風や雨を自分の力で動かすことができる。人々が協力すれば天災もなくすることができるという賢治の考え方があると思う。

N児の発言が心に響いた。「Hさんはすごいと思った。作品と賢治の生き方をつなげて考えていたから。」さらにM児は、「Hさんが言ったように書いた作品を知ると、賢治の生き方がわかってくると思う。『セロ弾きのゴーシュ』も『風の又三郎』も読んでみたいと思った。」H児の発言の重みを仲間がしっかり受け止めている。H児の読書の姿勢が生み出したものだ。読書することの意味が、心を育て人間をも育てるものであることの一端を見た気がした。

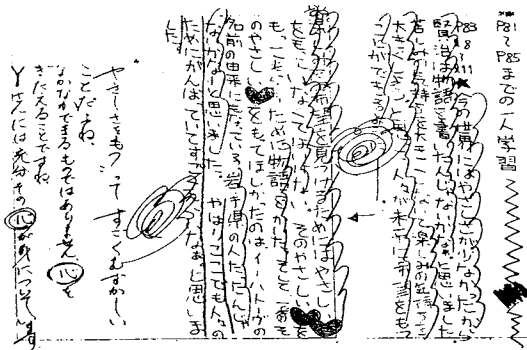
子どものノートより



② 学習の見通しが持てるように自分の思いや考えの表現を促す

読み取ったことをもとに自分の考えを持つことができる

キーワード板書を活用することで、自分の思考の位置とほかの子の思考とのかかわりをはかる



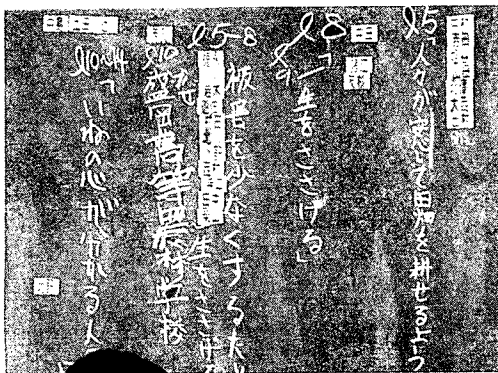
資料1 一人学習

子どもは教材文と出会った時、まず一人学習を行い、言葉に立ち止まって自分なりの想像を広げたり、みんなで解決すべきか自分で解決できるか見きわめながら自分なりの授業プランを立てる。

(資料1)

授業プランを立てる際、本文の中の心動かされた言葉や叙述を自分の読み込みのうえでの立ち止まるべき「キーワード」とし、一人学習の最後にそのキーワードを黒板に書く。これが「キーワード板書」という活動で、自分のこだわりのある言葉を書き、ネームプレートを貼る。例えば、左の写真では、「人々が安心して」という言葉に、7人がネームを貼っている。さらに特に光っている言葉として「安心して」に赤チョークで線を引いてある。子どもたちが心動かされたキーワードは「安心して」ということになる。この7人は同じ言葉に心動かされたが、「どういうところが似ていて、どんなところが微妙に違うのかな。早く読みの交流がしてみたい」といった思いで、次の授業への意欲が高まるのである。

前時の終末に書くキーワード板書〇〇さんと同じ言葉に立ち止まっているな

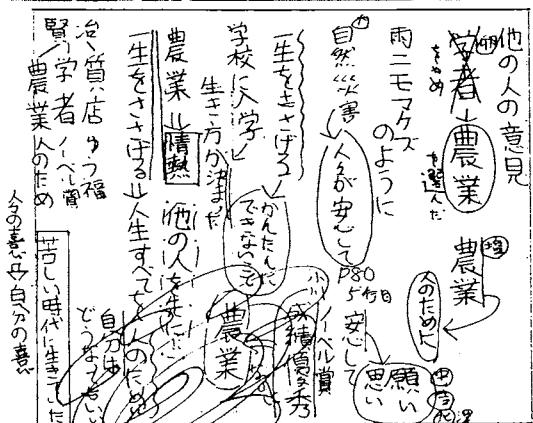


つまり、「キーワード板書」のメリットは、誰がどの言葉に心とめているか、また自分と考えの根拠が同じ子は誰か、ぜひ考えが聴きたい相手は誰か、などと板書を見ながら次時の自分なりの授業プランを思い描くことができるところにある。「この問いを〇〇さんに投げかけよう」とか「自分と同じ言葉に心動かされた〇〇さんと自分の思いとの違いは、どんなところが授業の発言の中でしっかり聞き分けよう」など板書を見ながら自然に仲間とのかかわり合いのプランが描くことができる。こうして次時への前向きな姿勢が自然と身についてくる。主体的に活動し、自ら考える、子どもの姿の出発点がここにある。

子どもが書いたキーワード板書をもとにフリーで発言していき、その日の板書当番が黒板に書き

授業を進めていくうちに動いていくキーワード板書
～子どもたちの思考の深さがわかる～

子どもが創る板書



資料2 D児のノート

込んでいく。友達の考えをしっかりと受け止め、短い言葉でテキパキと記録していく姿には感心する。もちろん大切な部分が抜けたり、聞き逃した場合は教師の方でサポートしていく。

驚かされることは、子どもが実によく友達の発言を聴いているということだ。板書当番でなくてもノートに大事なことを自分の好きな形でメモしているため、聞き逃すことがほとんどない。

例えば、5月27日の授業の第15発言のW児の発言「農業に一生を捧げるってかんたんにできるものではないし、農業への熱い気持ち分かる。(略)」に対し、D児は「かんたんにできないこと」を強調してメモした(資料2)。D児の心にはその言葉が強く響いたことがわかる。W児の発言のキーワードをD児はそうとらえたのである。ノートに自分自身の思考の足跡を自分らしく残している。言葉に敏感な鋭い感性を磨くことがより豊かな想像力を培い、言葉への興味を生み出す基盤となると共に、読書意欲の源泉にもなると考えた。

こうして日々の授業の中で、友達の発言のポイントは何かと、意識しながら聞き取ることが身についてきているので、発言の要旨も自ずとキーワードでとらえることができる。話し手が伝えようとしていることのポイントを、聞き手がしっかりと受け止めていくことの積み重ねが、仲間とかかわり合う中で、お互いが高まっていくことができる授業の創造へとつながる。

③ お互いの考えを話し合う場・対話する場を設定し自分の考えの再構築を促す

読みの交流でお互いの考えを聞き合うことができる

賢治の他作品を読み、賢治の人間像についてまとめることができる

ア 話し合いの中で生まれてきた思考の深まりを交流する場を生かして

一人一人がただ漫然と自分の考えを述べているだけでは深まりや高まりはない。お互いの考えを話し合い、聞き合う、という交流の活動を通してこそ深まりが出てくる。そのためには、話し合いの流れの中で生まれた疑問を素直に、子どもが自分の言葉で投げかけていくことである。そうすれば話し合いに深まりが生まれ、今まで気づくことがなかった賢治作品のよさに気づいたり、今まで考えもしなかった友達の素敵な考えに触れたりできるのである。その経験を積み重ねることが意味ある話し合いの進め方を体得し、教材の持つ価値を大いに受け取り、自分を高めることにつながっていく。

5月30日の「賢治の生き方・考え方をさぐる②」の授業を考察してみる。この授業では、Y児のみんなへのかかわりのおかげで、子どもたちの心の中に「賢治作品をもっと読んでみたい」「命はみんな平等、命の重さに重い軽いはないんだ」「賢治って素敵な考え方の人だ」「もっと知りたいな」といった気持ちを芽生えさせてくれた。

以下は、思考が深まるきっかけとなったY児の発言が出てくる授業場面である。

- C: 賢治はやさしい心を育てるために詩や物語を書いた。物語に理想や体験をつめていた。
- C: 力を合わせるには優しい心がないとダメ。未来に希望を持つ、楽しみを見つける。そのためには優しさが必要。
- C: 岩手は賢治にとってはいい所だ。

C: ぼくはあまりいい所だとは思わない。賢治はいい所になってほしいと書いていろいろお話を書いたんだと思う。

C: 岩手は賢治の生まれた時、災害ばかりあっていい所とは思えない。

C: いろんな災害があっていろんな苦しみを体験しているから優しくなれるんだ。

C: 農業をしている人々に安心して農業をしてほしいから農業を研究したし、たくさんの童話を書いたのも人々のため、周りの人々のことを大切にしたいという考え。

C: 生まれた時から不幸がたくさんあって、物語の中でイーハトーヴを夢のような場所にしたいと思って書き続けた。

C: 岩手のみんなにいい暮らしになってほしいという願いがあった。

C: グスコブドリの火山を人工的に爆発させて生きて帰って来れない、人々のために命を捧げてまでも何とかしてみんなが安心して暮らしていける岩手にしたいという賢治の願いがある。

Y: みんなにぜひ考えてほしいんだけど、「北守将軍と三人兄弟の医者」という物語の中で人間の病気を治す病院、動物の病気を治す病院、植物の病気を治す病院、この三つがどれも同じ大きさのわけを考えてみませんか？パディに相談にいてもいいです。自分の意見がまとまった人は黒板のこの場所にネームプレートを貼って下さい。

このY児の発言が授業を動かす力となったのは、以下の三点である。

①授業を深める発言になっている。

この疑問を投げかけることで、賢治作品の根底にある賢治人生観そのものを考える時間が共有できる。

②学習形態の選択を子ども達自身に決定するように促している。

パディの活用を促すことで自分の出した課題を考える上で少しでも抵抗のある子どもの負担を軽くしようという心遣いがある。

③この課題に対して自分の意見がまとまった子の動向を把握するための手立てを提示している。自分の出した課題について誰の考えを聞いて授業をすすめるかをY自身がプランを立てるために黒板の活用を促している。

教師である私の支援はY児に対して「あなた自身もみんなのところを回って、ノートを見たり、対話の様子を聞いたりして、誰に指名するかを考えればいいよ。」と助言したことである。こう声をかけることでY児自身が心開放され、授業の中で動きやすくなり、子ども自身が自ら動き、自分たちが授業の主人公であると自覚することができるのである。

Y児は第一発言者にH児を指名した。

H: 人も動物も植物も位がなくてどれも大切でどれも欠けてもだめだから、どれも同じ大きさ。

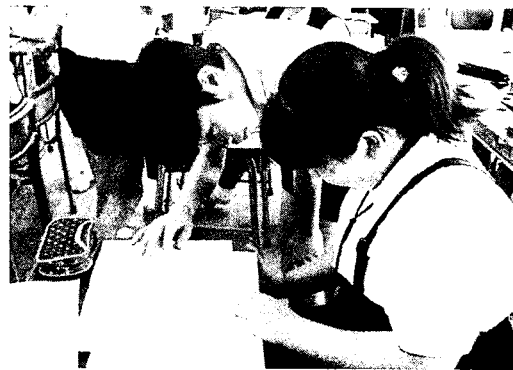
C: 賢治が人間も動物も植物もどれも大切だと思ってるから。

C: 全て大切で公平に思っているから。

C: 賢治はみんな平等ってことを、小さな虫だからふみつぶしていいとかそんな差別をなくしたいと思ってる。

C: どれも命で同じ重さだと思ってる。命に軽いはない。

C: どの命も欠けてはならない。全部大切。



誰に指名しようか「考えまとまった？」

Y児がH児を指名したことで、H児の発言がほかの子どもの発言を引き出すきっかけとなった。こうして、子ども達は、賢治の生き方の根幹にある理想「人間も動物も植物も互いに心通い合うような世界」を豊かに読み込んでいくことができた。

イ パディシステムの活用

課題について考える際、自分の考えに自信がなかったり、誰かに自分の考えを聞いてほしい時に活用するペアとしてパディシステムを取り入れている。比較的話すことに抵抗がない子と少なからず抵抗のある子でペアを組んでいる。パディで対話し、認めてもらうことで自信が持てることはもちろん、自分の考えのよさに気づかせてもらったり、一人では偏りがちな考え方に違

う視点をあたえてもらったりと、ペア学習として効果的なものである。T児は、6月4日の「あゆみ」の中で自分の心の動きを以下のように書いた。



ノートにまとめた授業のふりかえりをバディに話し、思いの交流を行う

《バディのNさん、ありがとう》

(略) その時間に発言できなくてもノートをきちんと書いてあります。すごい人もいます。どんどん深めていけばいいし、言える時に言っていけばいい。これからも、どんどん深めていきたいです。そのためにみんなでやっていきたいです。きょう研究授業で緊張していたけど、バディのNさんと意見を交換して自信がついて言えるようになりました。どうもありがとう！

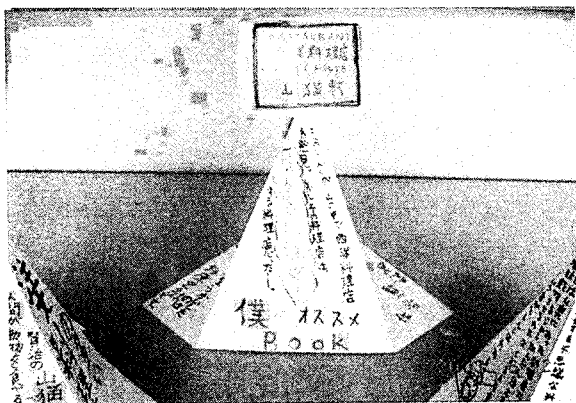
このT児は、授業の中で友達の発言をよく聴き、素直に反応し、その日の授業のふりかえりはきちんと「あゆみ」に書いてくる。ただいつも自分の意見に自信がなく積極的になれずにいる。日頃尊敬しているN児の励ましは、何よりの支えになった。子ども達が、しっかり高め合っている姿が印象的であった。

④ 自己評価活動で自分の活動のよさの自覚を促す

お互いの紹介の工夫やよさを認め合うことができている

賢治のいろいろな作品を読書することで賢治の世界が心の中で、いろいろ広がっていき、それを友達や周りの人に紹介したいと考えた。そこで一人一作品の紹介する場を設け、キャッチコピーを熱心に考え、目立つように立体的なディスプレイも工夫した。「おすすめ、マイブック」のコーナーを図書室前につくり、賢治の本の横にそのおすすめ文を添えた。前を通りかかったかなりの子ども達が、賢治の本を手にとって読んでいた。その姿を見ることが自分たちの活動へのよき評価となり、励ましとなった。

子どもの工夫したキャッチコピーに目を向けると、一人一人が心動かされたお話のエキスを伝えようと言葉を選んで作り上げたことがわかる。その中の一部を紹介する。



お気に入りの賢治の本のそばに、この紹介文を添えた～誰か手に取って、読んでくれるかな？～

「セロ弾きのゴーシュ」

- ・だれにでも不思議な力はあるんだよ。
- ・ちょっとしたことで幸福になれる、そんなことを教えてくれるお話。
- ・奇妙な優しさがわたしたちに不思議な幸福感を味わわせてくれる。

「どんぐりと山猫」

- ・賢治の自然への思いが強く伝わってくる。

「猫の事務所」

- ・この本は差別される人の悲しみがわかる本
- ・この本を読むと人の差別の痛みがわかる

子ども達は、賢治作品の本の紹介に熱心に取り組んだ。T児は「あゆみ」でその活動の自分の心の動きを以下のように書いている。

《本の紹介》

きょう国語で、賢治の書いた本の中で一番気に入った本を紹介するために画用紙にまとめました。わたしは「雪わたり」という本にしました。少しでも本を好きになってもらい賢治ワールドにどんどん入り込んで行ってほしいなあ、と思います。わたしも賢治の物語は大好きなので、そのおもしろさを知ってほしいと思います。

自分が感動した本の紹介を通して、友達にもその感動を伝えていくことは、読書を促し、感動を共通体験できることだ。それは、目には見えないが、心のつながりができたことととらえることができる。賢治という人間の生き方・考え方を、作品を通じて共に感じるができる。それが作品を通して心が豊かになっていくことである。読書することは心の宝物が増えるということ。少しでも多くの子どもがT児のように、心を豊かにしてくれれば、と願う。

⑤ 単元を終えて

6月4日、「賢治の生き方・考え方をさぐる③」で、賢治の考え方や理想が社会に受け入れられなかったことを話し合っていた時、「機械化・自動化が進む世の中には、『人間らしい生き方を願い、人も動物も植物も心通わせて生きる世界を希求していた』賢治の考え方は受け入れられなかった。」ということが多く出てきた。その中で「手塚治虫さんはその機械にも心があるようにしたいと考えた人。実は、宮沢賢治の理想と手塚さんの求めるものは、同じなのではないか？」と発言した子どもがいた。一瞬子ども達の反応が「えっ？機械にも心が？」という感じだったが、ちょうどアトム誕生50年の今年。子ども達が注目していた手塚さんの考え方に話題が及んだことで、「ぜひ手塚作品を読んでみたい」という声があがった。早速次の日、手塚さんの作品が続々と集まり、休み時間は手塚ワールドと化していた。子ども達は時間も忘れて夢中になって読んでいた。まさに心の中で「賢治と手塚さんは、同じ考え方か？」という問いかけを持ちながらの、テーマ読書の始まりであった。こういう読書姿勢を持ち、豊かな読書経験を積み重ねていくことが、生涯読書につながっていくのだろうと確信できた。

本単元を通して、子どものいろいろな成長を感じ、豊かな言語感覚にふれ、実りある学習活動を展開することができた。中でもT児が尊敬するN児の発言が印象に残った。

「賢治は、自然を見ながら歩くと鳥の声が聞こえたり、風が吹いてきて気持ちよかったりする。鉄道だったら便利だけれど鳥の声は聞こえないし、気持ちよい風を感じることはできない。景色も一瞬のうちに消えてしまう。賢治自身の考え方の『苦しさの中に楽しさを見つける』ことが賢治自身の生き方だったと思う。」と述べたことは、みんなの心に強く残ったと思う。この発言が出た時、すかさずわたしは、どこかで伝えたいと考えていた「注文の多い料理店」の序文を読み聞かせた。

わたしたちは、氷砂糖をほしくらい持たなくても、きれいにすきとおった風を食べ、桃色の美しい朝の光を飲むことができます。

またわたくしは、はたけや森の中で、ひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろうどや羅紗や、宝石入りのきものにかわっているのをたびたび見ました。

これらのわたくしのおはなしは、みんな林や野原や鉄道線路やらで、虹や月明かりからもらってきたのです。

(中略)

けれども、わたくしは、これらの小さな物語の幾切れかが、おしまい、あなたのすきだったほんとうのたべものになることを、どんなに願うかわかりません。

大正12年12月20日

宮沢賢治

この序文とN児の発言がしっかりと重なり、賢治の生き方を感じながら読書していくことには素晴らしい価値を見い出さずにはいられなかった。目の前の子ども達が、読書することですきとおった食べ物を食べ、心をどんどん太らせてくれることを願っている。